

## 連載 堀口捨己の『利休の茶』を読む① 茶杓と非相称

近藤 康子（京都橘大学講師）



近藤 康子（こんどう・やすこ）

1985年生まれ。2008年京都大学工学部建築学科卒業。2014年同大学大学院工学研究科建築学専攻博士号（工学）取得。

2014-2016年 京都橘大学現代ビジネス学部都市環境デザイン学科助教。2016年 - 現在 同大学講師。主な著作に「近代建築家の茶室論にみる茶の湯の生活空間に関する研究」（博士學位論文、2014）、「建築制作用論の研究」（共著、中央公論美術出版、2016）。

### 近代と茶の湯、茶室

近代日本においては、絵画、彫刻、文学、音楽、演劇、建築、哲学などにおける「日本的なもの」に関する論考発表や座談会開催に代表されるように、継承・展開されるべき伝統文化が模索されていた。こうした時代背景のもと、伝統文化の一つでありながら、当時は単なる遊芸と見做され、衰退の一途をたどっていたとされる茶の湯も、次第に再評価されるようになってゆく。

近代における茶の湯再評価の様子は、熊倉功夫『近代茶道史の研究』（日本放送出版協会、1980）に詳述されるとおり、茶の湯の大衆化や茶の湯研究の盛行などから窺い知ることができるだろう。具体的にみてみると、茶の湯はまず女子教育において礼儀作法の一環としてカリキュラムに組み入れられ、嗜みや稽古事として認知されてゆく。また茶道雑誌の刊行やラジオ放送などを通して、教養の一つとしても周知されていった。さらに千利休三百五十年忌に伴う1940年前後の大茶会催行によって、専門知識をもたない人々にも、大衆的な娯楽として広く親しまれるようになる。一方で茶の湯研究をみてみると、岡倉覚三『茶の本』（岩波書店）と高橋龍雄『茶道』（大岡山書店）が出版された1929年を一つの画期として大きく進展したとされる。『茶の本』は、当時財界人の遊芸と見做されていた茶の湯を、日本文化の中心的なものとして知識人に広く認識させ、『茶道』は、明治以来はじめての概説書として、茶道史研究を本格的に始動させたものと意義づけられている。茶の湯はそれまで茶人自身によって自己学習的にのみ取り上げられていたが、それ以降は茶の湯以外の分野からも広く研究されるようになった。

また茶の湯研究の盛行の背景には、研究者同士の専門分野を超えた文化的交流があ

る。その代表として茶・花道の季刊誌『瓶史』（1930-1939）を基盤とする文化サロンがあげられよう。『瓶史』の編集者・西川一草亭は、茶の湯をめぐる座談会を多数開催し、多くの知識人たちを集め、かれらに知遇を得る場を提供していた。建築家として茶の湯文化に深く関わったことで知られる藤井厚二や堀口捨己らも、この会合にたびたび参加している。

では、当時の建築界において茶の湯への関心はどうであったか。建築界の動向をみてみると、伝統的遺構が考究されるなかで、神社や住宅にくわえて、やはり茶室も称揚されていたことがわかる。茶室が社会的に大きく取り上げられるようになるのは、文献考証を主とした建築史研究の対象が、社寺建築から住宅、城郭、茶室へとひろげられるようになったと言われる1930年代前半のことである。特に1934年は建築ジャーナリズムにおいて茶室が注目された年として知られ、海外の建築情報の紹介を主とする雑誌『国際建築』において、初めて茶室特集（1月号）が組まれた。そこでは桃山から江戸時代にいたる伝統的な茶室が紹介され、蔵田周忠、滝澤眞弓、岸田日出刀、ブルーノ・タウト、板垣鷹穂、堀口捨己らにより、伝統建築の今日的意義を主張する論考が発表されている。また伝統建築を再評価しようとする動きに並行して、当時の新しい茶室や、茶室の造形的特徴を反映させた数寄屋も大きく取り上げられた。同年4月には、雑誌『建築世界』において北尾春道監修のもと『数寄屋建築特輯號』が刊行される。そこでは大正、昭和初期の茶室や数寄屋が紹介され、吉田五十八、飯野香、木村清兵衛らにより、それらの設備、構造、様式などに関する論考が発表されている。

こうした動向にあわせて、建築家たちによる新しい茶室、数寄屋の提案も多くなされるようになってゆく。『岡田邸』（堀口1933）や「吉屋信子邸」（吉田1936）、「村野邸」（村

野1942）などはその代表例といえよう。1950年代前半には、堀口の「八勝館みゆきの間」（1950）における日本建築学会賞受賞、新日本茶道展覧会における堀口と谷口の新茶室の提案（1951）、吉田の「日本建築の近代化」における芸術院賞受賞（1952）などにみられるように、茶室や数寄屋が単なる懐古的なものとしてではなく、近代建築としても社会的に広く認識されるようになったと考えられる。

### 堀口捨己の『利休の茶』

近代において伝統的な茶室や数寄屋が受容され、昇華されてゆく背景の一つに、建築家たちによる茶室研究の進展があったことを看過してはならない。茶室を初めて体系的に研究した武田五一、環境工学の観点から研究しつつその成果を自らの作品に取り入れた藤井厚二、茶室を茶の湯との関わりのもとに捉えようとした堀口捨己など、近代以降多くの建築家たちが独自の的方法論によって茶室研究を展開していた。鈴木博之「近代建築と数寄の空間」（『茶道聚錦6』、小学館、1985）によれば、武田や藤井が茶室におけ

る床の間や設備などの物理的構成を問うたのに対して、かれらに後続する堀口やそれ以降の建築家たちは、物理的な問題よりも空間的な問題を問うていたと指摘される。また、とりわけ後者の建築家たちによって茶室や数寄屋は近代建築の一類型として飛躍的に展開されたと示唆されている。

茶室が建築物とさえみなされていなかった時代において、建築家たちはそこにどのような空間の問題を見出したのだろうか。またそれほどまでにかれらの関心を惹きつけた茶室とは、一体如何なるものだろうか。

当時の茶室に関する思想的基盤をなした建築家として第一にあげられるのは、堀口捨己（1895-1984）である。堀口が1920年代前半の洋行の際、パルテノンをみて「冷たきびしく寄りつくすべもない美しさの中に、打ちのめされて、柄にあう道を探さざるを得なかった」ことの果てに、茶室や数寄屋へと目を向けたのは、よく知られるところである（「数寄屋造と現代建築について」、1956）。かれは、ル・コルビュジエが「住宅は住むための機械である」と提言した数年後、「茶室は茶の湯のための建築設備である」という序文を掲げた論考「茶室の思想的背景と其構成」

（1932）を皮切りに、晩年にいたるまで多数の茶室研究を遺した。かれの研究の特徴は、先に述べたとおり、茶室のみに留まらず茶の湯もあわせて研究したことである。茶室と茶の湯の関係についての堀口の見解は、次の言に端的に示されている。

茶の湯の思想は茶室の思想的背景をなし茶の湯の制約は茶室を建築的に直接規定するのである。此意味で茶室を考察するには先づ茶の湯の思想と其性質を考察する事から初めなければならない。（『建築様式論叢』、p.7）

堀口は、研究の主題を茶室から茶の湯の思想へと展開し、茶人、茶杓、茶碗、炭、茶会などを幅広く取り上げた。かれは茶室研究を手掛けた当初から、文化サロンへの参加や、茶の湯に関する研究会への参与などに代表されるように、茶室研究を一つの契機として、建築学以外の諸分野の専門家と広く交流していた。そのなかで堀口は、たとえば自身の発見した史料「信長茶会記」を座談会に持ち込み、諸分野の研究者との意見交換の場を設けたことや、当時の著名な茶人や



（左）『昭和北野大茶湯』（1937）  
（中）『新日本茶道展覧会解説』（1951.10.2-9）  
（右）『瓶史』（1935.秋の號）  
「発見された信長の茶會記を読む會」  
はじめに、「九月十四日星ヶ岡茶寮に第二回宗瀨日記を読む會を開く、席上堀口捨己氏信長の茶會記が見付かったから、今夜は此席で是非夫を読んで頂き度いと云はれ、宗瀨日記を後廻しにして急に其茶會記を読む事になった」とある。



政治家との茶会や親交を通じて、歴史的価値の高い茶道具に実際に触れ、それについての教示を得たと述べるなどに見られるように、茶の湯に関する広範な研究を、茶室研究と同等に高い専門性をもって取り組んでいた。

堀口による茶室研究、茶の湯研究の代表的なものに、『利休の茶室』（岩波書店、1949）と『利休の茶』（岩波書店、1951）がある（前者は1968年、後者は1970年に鹿島研究所出版会より復刻される）。これらは、1935年以降とりわけ千利休研究が大きく進展を遂げていた時代背景のもと推敲された。堀口は『利休の茶』を、『利休の茶室』の思想的背景としての「茶の湯の心」を解き明かそうとしたものと位置づけ、その道程を「茶を読む」ことと言い表す。堀口が利休を目指すべき建築家の一人として、またかれの茶室を参照すべき古典の代表と捉え、利休のたどった道を再びたどり直そうと試みていたことに鑑みれば、利休の茶の湯の心として記すその文章には、堀口自らの建築論が重ね合わされていると言えるだろう。堀口が利休の茶を読み、さらに我々が堀口の『利休の茶』を読むことは、利休の茶室論、さらには堀口の建築論を明らかにすることの一端に他ならない。当然のことながらそこには近代に敷

行された茶室空間の問題も内包されていると思われる。

『利休の茶』は、上に示すとおり後年復刻され、新たな資料の発見などから多く加筆修正がなされてより精緻なものとなっている。ただし本連載は、茶室が近代建築へと昇華されたと思われる1950年頃の堀口の思想に関心を寄せるものであることから、初出の『利休の茶』（以下、本文中[利休]）を読み解くこととする。本書は「利休の茶の源と流れ」「利休の茶」「利休の茶杓」「利休の炭」という論考から構成される。利休に直接関わる後半の3論考では、茶会、茶杓、炭が主題とされている。なかでも茶会は他二つを内包する総合的問題と思われることから、本連載ではまず茶杓と炭、最後に茶会についての論考を取り上げよう。

## 茶杓と非相称

茶杓は茶入や甕に入れられた抹茶をすくって茶碗に移すための匙であり、それについて堀口は次のように述べる。

茶杓は一本の先の曲つた竹に過ぎないが、その中には、茶の湯の造形的な表れに於

ける傾きが、特に著しく示されてゐた。[利休-453]

茶杓は複数の部材から構成されるのではなく、単一の部材のみから成り、かつ極めて単純な形態をもつものである。それゆえに堀口は、茶杓に茶の湯全般にわたる造形的特徴を象徴的に見出していた。それは「茶座敷や茶庭をはじめ、物の置き所などに表はれた反相称性の傾き」[利休-453-454]と言われるように、非対称のことである。

堀口は、利休によって削られた茶杓の權左の一方が他方よりも広く、また角度も緩やかに取られていることや、節の上下で曲がっていることに着目し、次のように述べる。

茶杓の如きは、中心の線を通して、左右に匙形として、相称的に作らるべきことは、形を造る基の型としての考へで、さうでないことは、寧ろ表現の行き過ぎである如くに考へられないこともない。然し数寄人の眼や、使ひ勝手の細やかな手心は、なほそこにも、左と右とを釣り合ひ等しくする素直さを認めてゐないのであつた。[利休-398-399]



(左)「利休の茶室」と「利休の茶」  
(右)座談会「東西美術を語る」1949.3.27  
雑誌「茶わん」1949.6月号掲載  
於新宿ニューホテル・ととや  
左より「高橋誠一郎、梅花草堂主人、  
谷川徹三、堀口捨己」。出席者他4名。  
床には堀口所蔵の掛物が掛けられる。

堀口によれば、茶杓のように単純な形態をもつものは、左右対称とすることが基本と言われる。反対にそうでないことは、利休の最も忌避する「表現の行き過ぎ」に相応する可能性があることが示される。こうした考えに基づき堀口は、茶杓を通して非対称の成立根拠ともいえる茶人の「眼」や「手心」たる理念の顕著なあらわれを看取していた。

堀口は、茶杓を非対称に削る茶人の理念について、史料を引用しつつ以下の三つの問題に言及する。まず一つめは、「茶入へ茶杓を掛けた時に、見事に見える」[利休-399]と言われるように、複数の茶道具による配置の美しさへの配慮があったことである。二つめは、「茶入に掛け勝手のよいため」[利休-399]と言われるように、茶杓を茶入れにかけるという茶人の動作を円滑に行なうための機能的な形として設えられたことである。そして三つめは、「竹の生ひ立ちの織が、節上と節下とでは曲つてゐた場合、…(中略)…竹の織なりに、おのづからに曲げて削つてゐた」[利休-401]と言われるように、材料における生来の形態が尊重されたことである。これら三つの問題から明らかとなるのは、堀口が茶杓における非対称の問題を、茶杓のみの問題として捉えるのではなく、他の茶道具や茶人の動作、材料の形態など、様々な事物との関係において捉えていることである。一つめにあげた配置の問題に主眼が置かれる当時の茶室論一般と比べてみれば、堀口は非対称を事物相互の関係性という極めて広い意味において用いていたことがわかる。

また堀口によれば、非対称が茶の湯における造形的な「好み」とされ、そのうえで「見えるか見えぬかの境で、この傾を強く調べてゐる」[利休-403]と言われるように、非対称に削られた茶杓の背景には、「好み」としての表面的な現れを隠しつつ自然な表現として見せようとする意識があったと指摘される。

そして「茶を茶碗に移し入れて、茶をならし切る時に使はれるために…(中略)…磨り減ることもあらう心持ちを、出すのであらう」[利休-400]という言に端的に示されるように、その意識はあくまでも茶杓の道具的表現に託されるべきものと捉えられていた。すなわち、堀口が非対称の問題において特に重視していたのは、上記で二つめにあげた茶人の動作との関係性であったと言えるだろう。それゆえに、堀口は見た目の美しさを重んじる「眼」と使い勝手を重んじる「手」とを並列的なものとするのではなく、「手心」という一語とすることによってその重要性を強調していたと考えられる。

さて、堀口は非対称について「反相称」や「非相称」という語を用いるが、利休による非対称を主題とした論考のタイトルを、「茶杓の左右非相称好み」や「非相称の組立てと『飛雲閣』」としていることに鑑みれば、茶の湯における造形的特徴を十全に言い表す語として「非相称」を用いたとしてよいだろう。しかしかれはなぜ非対称という一般的な語ではなく、「非相称」という特殊な語を用いたのか。

堀口は茶室を「非相称主義」と位置づけたうえで、「茶室のあらゆる部分に繰返の忌避は表れてゐるが、然し見方によつては、繰返しを発見するかも知れない」（『建築様式論叢』、p.48）と述べる。引用で言われる「繰返し」は、左右対称を意味している。つまり「非相称」は、結果として厳密な非対称となるのではなく、あくまでも左右対称の「忌避」であることがわかる。これについては、堀口が「非相称」を「右左相称ないやうに整へる 意匠的 心構へから 出てゐたか否かを 指す」（『利休の茶室』、1949、p.643）と述べることから窺えよう。それでは「非相称」においては何が「忌避」されるのか。

この反相稱性が線に、面に、立體に顯れるのはそれ等の線や面や立體の中心、中心軸、中心平面が一致しないで、ある「ずれ」を持つことに歸する。（『建築様式論叢』、p.35）

この言説を一見すると、「非相称」において避けられるのは、中心に対する双方の均衡と考えられる。しかしながら、文末に「歸する」と言われるように、双方の不均衡はあくまでも結果であって、根本的な目的ではないと推察される。ここで、左右対称的な寝殿造りとそれとは異なる書院造りについて比較した堀口の言説をみてみると、寝殿造りについては「一つの建物と他とは渡廊下で、多く連がれる」（『書院造りと数寄屋造りの研究』、1978、p.34）と言われる箇所が、書院造りについては「建物と建物との間を渡廊下でつなぐこともあるが、寝殿造りで分かれていたものが、一つに纏められ、一つの屋根に組み建てられる傾向を持つ」（同書、p.35-36）と言われる。これらの引用に鑑みれば「非相称」とは、左右の事物を一という中心と他との関係において捉えることを避け、部分と部分、部分と全体との関係において捉えようとすることと解される。先に「非相称」が部分的な左右対称を含みうるとされたが、それは左右対称における一と他という関係が、より大きな全体の一部をなす限りにおいて成立するのであり、この意味において「非相称」は、左右対称をただ否定するだけのものではなく、超越的に内包しうるものであることがわかる。以上のことから堀口は、ただ否定することとしての「反」ではなく「非」を、また中心に対して向かい合うという意味合いの強い「対」ではなく、それぞれの事物相互を意味する「相」という語を用いて、「非相称」としたと考えられる。（続く）